



それが彼女の

それが彼女の

性交戦略！

seikou senryaku

添牙いろは
Soekiba Iroha
イラスト：みくろ

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

それが彼女の性交戦略！

添牙いろは

目次

彼女は『性』で生き延びた。.....	5
その白百合は蕾のままで	103
無色透明全裸の旅	139
雌のカラダに雄のカラダを.....	181
ナチュラル・ボーン・プリンセス.....	225

彼女は『性』で生き延びた。

ヘイロームンの町は、二度死んだ。

一度目は、魔物の群れの襲来によつて。

だがそれは、男たちが団結することによって退けることができた。

しかし――

今では人々を救つたはずの男たち自身が横暴に振る舞っている。

弱き者たちの平穏を踏みにじつて。

町の女子供に安息が訪れることはない。

弱肉強食――それがヘイロームンの基本原則となつた。

しかし、その一角の秩序だけは、混沌に汚されることはない。

へ龍の叢雲亭――町外れに佇むひっそりとした酒場――

そこには、選ばれし者だけが集う。

富と名誉を手にした男と、

美と気品を備えた女と、

そして、

伝統と情熱によつて生み出された銘酒の数々が。

ゆえに、貧しき蛮人が訪れることはない。

余裕のある男を相手する女たちにも少なからず余裕が窺える。

とはいえ、

資格さえ満たしてしまえば、客は客である。

例え招かれざる者だとしても——それを拒むことはできない。

「うつひょー！ やっぱここの酒は超ウメエゼエ！」

「えーと、ヨランダちゃんつーたっけ？ この後オレたちと遊ぼうぜー」

「金ならあつからよオ！ ダーッハッハアー！」

下品な大声を上げる三人組の乱入により、他の男性客はすっかり引き上げてしまった。

彼らがどんな手段で一攫千金を手にしたかは判らない。

それでも、ジャラジャラと見せつける金貨の輝きは本物だ。

客である以上、無碍に追い返すことはできない。

が、酒場のマスターにも誇りがある。

自分の目利きで集めてきた逸品をあんな雑に煽られて許せるものではない。

とはいえ——

誇りはあっても、腕力はない。

フロアはヤツらの貸し切り状態となっており、他のお客様の迷惑に——という決ま

り文句も使えない。

そして、どんなに女が苦痛を訴えても、この町で相手にされることはない。

「やつ、やめて下さい……っ！」

ヨランダはこの店一番の人氣嬢である。

今夜もせっかく上客と楽しく接待おしごとをしていたのに、コイツらの暴挙ですべてが台無しだ。

際どく魅せる胸元はだらしく引き下ろされ、酒臭い口が乳飲み子のように吸い付いてくる。

助けて——とカウンターの向こう側に視線を送るが、この店唯一の男は申し訳なさそうに俯くだけ。

足元を凝視しながら、ただただ連中が立ち去るのを耐え忍んでみるも——

「おい！ 次の酒持つて来いっつーてんだろーが！」

「キミはジェンマちゃんか。金貨やるからヤラせてくれよオ！」

「今日の仕事はもうやめてさ、あっちの宿で俺たちと楽しまねえ？」

——もうダメだ！

彼女たちに何かあつては、明日からの営業にも支障を来す。

こうなつては……最後の手段に頼るしかない……！！

店の隅で震えていた新人・ラウラに、マスターはこつそり手招きをする。そして、裏口から逃して、彼女にそつと言伝を託した。

「すぐにエルメを呼んできてくれ。報酬は——ボトル三本」

ラウラは、彼の言葉に深く頷く。

せつかくこの店で働けるようになったのに、こんな形で居場所を失うわけにはいかない。

女たちにとってここは、自分が自分であるための唯一の希望なのだから。

その後も男たちの狼藉が止むことはない。

馬鹿騒ぎは店の外まで響き渡り、常連客さえ入ることなく踵を返してしまう。

が、そこに——重い押戸がキィと鳴った。

その小さな物音に、酒乱どもは気づかない。

完全に店は占拠し、この女は好きにできる——連中はどこまでも驕り高ぶっていた。

ゆえに、彼女もまた、似たような一人として映っていたのかもしれない。通りを歩けば誰もが振り向くプロポーション。

豊かな胸の谷間を、太ももを、惜しげもなく開かし、

その両者を繋ぐ腰はすがりつきたくなるほどに細い。

ふわりと長い髪をなびかせて、

背筋を伸ばして店をカウンターまでやつてくる。

だが、そこに人の姿は見えない。

また小さくなって隠れているのか……と呆れながら、彼女はその席に腰を下ろした。短くタイトなスカートは中が見えてしまいそうなのに危ういが、彼女は構わず足を組む。そして、白く露わになった肩に掛かる柔らかな髪を鬱陶しそうに指で流すと、テーブルの裏を覗き込んだ。

人の気配を感じて、マスターは恐る恐る顔を上げる。

「エ……エルメ……や々と来てくれたか……」

この惨状は改めて説明する必要もない。

ゆえに、彼女が告げるのは一方的な条件提示。

「この店には世話になってるからね。一〇本で一肌脱いであげる」

「じっ——!？」

法外な報酬に絶句するものの、それを拒める立場にない。

悪い冗談であって欲しい……と、少しだけ顔を出してみるも、商売女は既に仕事に取り掛かろうと事件現場に足を向けていた。

クライアントからの恨みがましい涙目を背に受けながら——エルメは胸の谷間に指を差し込む。

その中身は、既に波々と注がれたブランデーのよう。

ゆえに、縁をクイと引き下ろせば——中身はポロリと溢れ出してくる。

だが、彼女の両手はそれだけに留まらず——

腰を、

腿を、

広げられたネックラインが滑らかに撫でてゆく。

そして、足首まで届いたところで——彼女は絹の敷居を迷わず跨いだ。

女の視線の下には男たちの後ろ頭。

彼らは背後の様子にも気づかず上機嫌である。

それじゃあ、もっと悦ばせてあげようかしら？

彼女は無礼な一団に向けて凜と言いつつ。

「ちよいとアンタら、セックスがお望みなら私が相手してやるよ」

その甲高い淫語に男たちは一斉に振り向いた。

しかし——

ある者は、豊満ながら張りのある上向きの乳首に、

ある者は、割れ目を覆いながらもふつくらとした性徴を魅せる股間に、ある者は、ヘソの下に彫られた美しい入れ墨に――

両の眼は釘付けとなり、声を出すことさえできない。

そして、ようやく絞り出した言葉は――

「ち……痴女……？」

彼らとて、女の裸は大好物である。

が、このような酒呑みの場で、

誰に脱がされることなく一糸纏わぬ姿となり、

自分から男を求めてくるとは――

これにはさすがに面食らってしまった。

が、彼女はそれを平然と受け止める。

これこそ、自分が生まれ持った最大の武器だと熟知しているから。

「嫌がる女の口に言い寄る変態が痴女呼ばわりとは世も末だね。ほら、ヤリたかったらアンタらも脱ぎな」

胸を寄せて、腰をくねらせ、女はしきりに誘惑してくる。

しかも、女体^{カラダ}だけでなく、声から顔まで文句なしに美しい。

そんな特上の女が、自らその身を差し出してくるのである。

これには男たちもまごつくばかり。

さつきまでの威勢はどうしたのやら——エルメは手に余る乳房を揉みしだきながら、すっかり大人しくなってしまった迷惑客たちに挑発を続ける。

「どうしたの？ 女がこうして裸になつてゐるのに……粗チンを晒すのが恥ずかしいのかい？」

キヤストの誰かから、クスッと蔑む笑いが漏れた。

それが耳に届いてしまったから——男として、後には引けない。

「粗チンかどうか——」

「見せてやろうじゃねエか！」

「すぐに足腰立たなくしてやるわ！」

三人は憤然と立ち上がると、ガチャガチャと自分の服に手を掛け始める。
が、女たちから悲鳴は上がらない。

全裸の救世主が来た時点で、このような展開になることは判っていたから。

「ほらほら、素っ裸になったヤツからこつちに来な。すぐに気持ち良く射精イカさせてやるよ」

続々と詰め寄ってくる全裸の男たち。

そんな汚いものに囲まれて——その中にエルメは臆せず屈み込む。

「おらっ、早く啞えろや！」

先端を彼女の頭をグリグリと押し付けるが、この程度で動じたりはしない。

「つたく、慌てなさんな。お口もマンコも一つずつしかないんだから」

左の男から順に、軽く相手をしていく。

先を舐め、

袋を撫で、

腰から尻まで両腕でゆったりと包み込んだ。

男たちはニタニタと期待に股間を膨らませているが――

エルメには感じ取ることができる。

触れた時の微かな反応を。

そこに含まれている特別な色を。

むず痒いのはまた別の――性的反応。

彼女の手に掛かれば、それを隠すことはできない。

傘や裏筋の他には――

コイツは内腿、

コイツは腰、

そしてコイツは……尻穴か？

ヘイロームンにやってくる男は得てして女が目当てである。

男色家が好んで寄り付く街ではない。

だから、きつと――

「フツ、女に干でつてるからって、男遊びは大概にしときなよ？」

誰とは言っていない。

が、自覚はあったのだろう。

秘密を暴かれてしまった右の男はみるみる顔を赤くしていく。

「悪かったね。お詫びにアンタにはマンコを使わせてやる。寝な。残りは指とお口だよ」

ツレに対する同情もあったのだろう。残る二人も大人しく一番美味しいところを譲ってやった。

少し不機嫌そうに床に仰向けになる尻穴男。

それでも、肉の柱は機嫌よく上を向いていた。

そこにエルメは指を添え、ヌルリと根本まで飲み込んでいく。

彼女に恐れや不快感は見られない。

さも、当然のように。

何事もなく平然と、交わらされる男女の性器。

これには、男の方から驚きの声が上がった。

「お……お……コイツは……!?」

どうせユルユルなのだろう——と高を括っていたがとんでもない。
膣内^{なか}はニユルニユルと男を搾り上げ、思わず腰がヒクついてしまう。
性感に身を振る姿を見せつけられ、他の男たちの気も焦ってくる。

「おいっ、こつちも早く頬張れよ!」

「両手も使ってしつかりな!」

男たちは我先にとエルメに汚物を突き付けてきた。

自らの弱みを無防備に晒して。

本当に馬鹿なんだな、と彼女は思う。

もし、こちらが後先考えなければ——

握り潰されたり、

噛み千切られてもおかしくない。

だが。

エルメはハイロームの女である。

暴力に訴えたところで、待っているのは男たちからの更なる暴力。
そのような軽率な事件を起こして、街を追われたくもない。

ここで生きていくのなら、ここでのやり方で――

愛撫に紛れて、彼女は軽く男の肌に爪を立てる。

性感帯を嫩られて、男たちは気に留めることもない。

しかし、これは深い意味を持つ。

性を操る――魔術的な意味を。

小さな傷々は、一つの図形として完成された。

そこにエルメは、密かに魔力を注ぎ込む。

すると――！

「おっ、お……ヤ、ヤベエ……!!」

男の身体は単純にできており、精巣が圧迫されると耐え難いほど敏感になる。ならば、体内の水分を送り込み、薄めて膨らませてやれば良い。

「こ……こんなすぐに射精^{イク}はずが……!!」

戸惑う男二人を両手で握り、エルメは容赦なく扱^シき上げていく。

「ホラホラ、もう降参かい？ だったらそのまま……射精^{イク}ちまいな！」

ビュルッ！ ビュルルッ、ビュルル……ッ！

ビュクン！ ビュクンッ！ ビュクルル……ッ！

エルメの両側から、生温かい白濁液が降り注ぐ。

この匂いも、彼女はそんなに嫌いではない。

男が女に屈した証——その情けないツラもなかなか見ものだ。

それじゃ、股の男にもそろそろトドメを刺しておこう。

彼女の下腹部に彫られているのは、ただの装飾ではない。

そこには魔法陣が内包されている。この術式が起動している限り、男に妊娠はらまされることがない。

が、膣内射精は別問題である。

挿入いれるのは好きだが、この程度の男に子宮おくまで汚されて気分がいいはずもない。ゆえに、根本に刻んだ術式に魔力を流すと、すぐにズルリと腰を上げる。

それと同時に——

「あつ、あ……あ……あ……!!」

白い噴水がビュルビュルと噴き上げられた。

が、それは留まることを知らない。

エルメは何だか面白くなってきた——自ら肉塔を擦り始めた。

「あつはつは！ 射精でする射精でするまだ射精でする！」

触れれば触れるほど、男の全身は跳ね上がる。それは、まな板の上の鯉のように哀れで、そして無力に。

「ひっ、ひいっ……も、もう……!!」

疲労感に次ぐ疲労感。

下半身に力が入らず、立ち上がることもすままならない。

最初は早漏なツレに蔑んでいた男たちも、その悶え方には少し腰が引けてきた。が、エルメはそれを逃さない。

肥大化したままの肉棒にバツと掴みかかると、同じようにゴシゴシ扱いていく。
「アンタのチンポも愛でてやるよ。嬉しいだろう？」

「ウヒイ!!」

それはまさに、牛の乳搾り。

女の指は乱雑なようで、的確に性感^{カセン}じる点へと踏み込んでくる。

そこが刺激される度に男からは精が迸り――

「ア、アグウ……フ……ッ」

射精の衝動は男の腰へと鈍く響くが、その快楽にすっかり溺れてしまっていた。気付いた時には既に手遅れであり――彼もまた、女の足元に膝を突く。

それでもエルメは性器を握り込んだまま、

手を休めることもない。

女の両手からはすっかり薄くなった白濁液が今も打ち上げられている。

残された一人は——ここでようやく異常に気づいたらしい。

苦しそうな嗚咽を吐きながらも、腑抜けた笑みを浮かべて射精めかれ続けるなんて……!!?

慌てて荷物を抱えて逃げようとするも、そんなものは既に店の女のコたちによって回収されている。

とはいえ、力づくで取り戻すにも——

「みんなー、そっちの男も欲しがってるみたいだから……誰か相手をしてやりなよー♪」

先程まで自分から求めていたクセに、打って変わって男はビクリと肩を竦ませる。エルメの呼び声に応じたのは——その男から嫌がらせの限りを受けていたヨランダだった。

「エッチなこと、したそうだったよねえ？ シチャウ？ チンチンニギニギしたげようか？」

ニヤつきながらにじり寄ってくる女に——男は恐怖しか感じない。

何しろ、自分の股間もすっかり憤っている。だが、女に触れられれば——

「オ……オゴオ……やめっ……やめてくれえ……」

「股間が痛エ……干からびちまう……っ！」

間違はなく、彼らと同じ末路を辿ることだろう。

もはや、裸の女は悪魔のようだ。

床に這いつくばる男を両手で掴み上げ、その魂をビュクビュクと抜き取っている。

女に捕まったら、自分も同じ目に——!!

「か、勘弁してくれエ!!」

このままでは、男が残さず搾り尽くされちまう!

着るものも着られず、彼は全裸のまま外へと飛び出していった。

それを見て——エルメはようやく手の内の二人を開放する。

どうにか手足は動くようだが、立ち上がるには至らない。

「ヒッ、ヒグ……ヒイ……」

「ガ……カ……ハガア……」

四つ足の獣と成り果てて、残りの二頭も店から逃げてゆく。

人とは思えぬ呻き声を上げながら。

もしここで、女が男に手を上げていたなら、男たちは徒党を組んで女を報復してき

たことだろう。

だが――

裸の女に足腰立たなくされた――それも、たった一人に三人がかりで。そんな泣き言を漏らしたところで馬鹿にされるだけ。

ゆえに、彼らは口を噤むしかない。

もう女遊びは懲り懲りだ、と悔みながら。

パタンと扉が閉じられて、ようやく取り戻された安寧の静寂。

そこに――女たちの歓声が満ち溢れた。

「ザマア！ 二度と来んなよ、クソ野郎！」

「悪銭身につかずってやつさア！ いい勉強になったねエ!!」

和気藹々と喜び合う女たちに、エルメは労いを掛ける。

「今夜は私の奢りだ！ 仕事なんて忘れて好きに呑んでくれっ！」

わーっと店内は盛り上がり、女たちは店のボトルを開け始めた。自分の好みでこの美酒を味わえる機会などなかなかない。

私の役目はここまでか――と、エルメは独り賑わいから離れていく。

それに気がついたのは、汚れた床を掃除していたラウラだった。

「エルメさん、その……呑まないの？」

自分は下っ端だからいいとして、救いに来てくれた本人が呑まなければ報われない。
だが……

「汚いもん浴びちゃったからね。湯浴みでもさせてもらおうよ」

だが、エルメは女たちの輪に戻るつもりはなかった。

彼女に、女同士で騒ぐ趣味はない。

酒を楽しむのならいい男と二人きりで。

そして、その後は心地よく抱かれない。

あのような連中はできれば遠慮願いたい、

それでも、男との肌の触れ合いには心が躍る。

だから、彼女は生き延びることができた。

男によって支配された、この暗黒街で。



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

露出少女と痴女の
モラルなき戦い！

裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる
露出少女・埋竹礼菜
大好きな男と子供を成すことに
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。
そんな三人に翻弄され続ける
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル！



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>

オンナ
たぎる女に

オトコ
おびえる男

乳を出そうが、尻を出そうが、
女の身体は贅肉扱い。
一方、成人向けコーナーには
半裸の男優ポルノがズラリ——
女が迫り、男があしらう、
そんな世界があったとしたら……？
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜
男女の性衝動が反転した社会とは
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

ア ス ト ラ ル ツ イ ン ズ

兄は指揮官に 妹は銃殺刑に

新政府軍の警備兵である兄と
旧政府軍の首謀者である妹。
ふたりの自己都合が交錯する
陰謀豊かなお手軽コメディ!?

妹vs王女様
お兄ちゃん争奪戦
勃発!?

テロリスト
反逆者
プリンセス
民間人
迫り来る
担がれる
そして...
アホの子
掻き乱す問題児!

くら
アストラ!?

妹はお風呂嫌いで
王女は珈琲竹が好き

アストラルツインズ
後日談的R-18短編集!

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/>

僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、
裸で野山を駆け回るのが
好きな少年。
非日常を求めて裸になり、
その快感に
目覚めてしまった少女。
孤独に背徳の性欲を
膨らませてゆく二人だったが、
ついに――

立派に
育った
露出癖

わたしとあなたの
露出交換日記

スピンオフでも
野外で全裸！

野外で裸に
になりたい男と
他人の痴態を
覗きたい女。

出逢ってはならない三人が
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>

正義の投与の 行く末は いじめ られっ子の 処方箋

添牙いろは

イジメ撲滅運動——

とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。
しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？

そんな疑問に突き当たる。

悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？

そして、運動を取り仕切る

学級委員・雨弓来禾の真の目的とは……？

イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>

女子校が異世界に飛ばされた!?

しかし——

そこに男女がいるならば、

惹かれ合うのが人のサガ!

女体の魅力で男たちを制圧した

第五の主人公・エルメを皮切りに

アカネもリューカも女の性を謳歌する!

剣と魔法とエロスの世界を

お楽しみ下さい!

空色書房

Sleeping under the sky